
機械仕掛けの左腕

戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械仕掛けの左腕

【Nコード】

N1063Z

【作者名】

戒

【あらすじ】

2105年。様々な分野の技術が向上し、様々な能力を持つ人々の存在が容認された時代。

超能力を操る”超能力者”。

超能力者の劣化版と呼ばれる”感染者”。

何ら人と変わらぬアンドロイドなど、様々なものが現れ、造り出された。

様々なものが現れ、造られると同時に、それら使った犯罪も多発するようになっていた。

そんな時代を生きる一人の少年がいた。

彼の名は霧崎^{キリサキ} 灰斗^{カイト}。

昼間は学園一の問題の部活、非公式部で妨害工作や暗躍活動などに精を出し、生徒会&風紀委員&執行部と戦う日々。

家では、世話焼きで灰斗にベツタリな姉と猫かぶりの凶暴な妹、そして自称最高水準ロボなどと過ごす日々。

そして外では、学園で名高い三姉妹と仲良く過ごす日々。

そんな彼の本当の姿は……

この作品は、エブリスタにも投稿しています。

プロローグ

しかいいっぱいにひろがる、あかとにごったしろ。

やくまえのウィンナーのみたいなのとかくろくてブツブツしたの、
うすいかわにつつまれたピンクいろのもある。

はだいろのうらにはりついてるこいきいろのスポンジとピンクいろ
のあいだからみえるしろいなにか。

ぶによぶによしたまるいのに、はんとうめいのまくにつつまれたピ
ンクのプリンのようなもののなにか。それとおんなじのがゆかにと
びちってる。

ハムみたいなのがちをながしてて、ぐちゃぐちゃになってる。

おとーさんはげんかんからかえってこない。

おかーさんはよくわかんない。

まいはこわれたにんぎょうみたいになってる。

ぼくは――

バガンツ！

「誰かい――」

「どう――し、た……」

「なっ！？」

なにかきこえる。また、みんなをぐちゃぐちゃにしにきたの？

「ひっ！！」

「いやあああああああつ！！！！！！！！」

なにかさけんでる？

「落ち着けっ。落ち着くんだっ」

「とにかく、中を確認するぞ。もしかしたら何かあるかもしれない」

コツコツってあしおとがきこえる。

もしかして、ぼくをぐちゃぐちゃにしにきたの？

みんなとおんなじようにぐちゃぐちゃにしにきたの？

ぎいっておとがして、ドアがひらいてく。

「うっ!?!」

「これは……酷い。酷すぎる」

おとなのひとがなんにんもはいつてくる。

みんなてっぼうみtainのもって、ぼーだんじょつききてる。

けーさつのひとかな？

「こりゃ生きてる奴なんていないぞ。みんな■■■■■」

え？ いまなんていったの？

「奥さんとお嬢さんは■■■■■みただ。……絶対に許せんっ！！」

「そうだな。でも、確かこの家には男の子がいたはずだぞ。探すんだっ」

たくさんのおしおとがある。ぼくをさがしてるの？ ぼくをぐちゃぐちゃにするの？

こわいっ。こわいよ。おとーさんっ！！ おかーさんっ！！ まいっ！！ みんなっ、みんなどこ！？

にげたいっ！！ みんなをさがしたいっ！！ でも、うごかないよ。

いたいよ、いたいよっ。たすけて……だれかたすけてっ！！

「っ!?! いたよ!! 男の子だっ!!!」

「なにっ!?!」

「状態はっ!?!」

「なんとか生きてるみたいよ。ホント、生きてるのが不思議なくらいの状態なのにね」

みつかった……。ぐちゃ、ぐちゃ、にされ、ちゃ……



ピッ、ピッ、ピッ、っとおとがする。

めがさめたら、まっしろなへやでまっしろなベットでねてた。

ぼくのまわりに、なにかたくさんものある。

「ん? 起きたのかい?」

へやにしろいふくをきたおんなのひとがはいってきた。

おいしゃさんかな？

「どうかな？ 気分は」

「わかんない……」

「そっか」

おいしゃさんはいすにすわって、ぼくのちかくにいる。

「あたしは……怖いかい？」

なんでそんなのきくの？

ぼくはこわくなんて――

あか、アか、あ力。

ぐちやぐちやのグチャぐちや。みんな

.....!

おとーさんはっ！？
おかーさんはっ！？
まいはっ！？
みんな
はっ！？」

「チッ、錯乱状態かつ!!
落ち着けっ、落ち着くんだ」

おいしゃさんにぎゅってされる。

あつたかい。

「大丈夫。君は生きてる。お父さんたちのことは……あとで教えてあげる。だから、落ち着くんのだ」

おいしゃさんがぼくのかおをみて、やさしくわらってる。

「いいね？」

「……うん」

おいしゃさんはぼくがおちつくまでぎゅってしてくれた。

……ちよつとたばこくさかったけど、いいにおいがした。



びよーいんからでれたぼくは、おいしゃさんのせんせーにてをにぎられて、知らないおうちのまえにきてる。

「今日からここが君の家だ」

「ぼくのおうち？」

せんせーはぼくのまえにあるおうちをゆびさす。

「そうだよ」

「おとこのひと、いない？」

「んー、いるけどみんな良い人だよ」

「おとこのひとがいるならやだ。せんせーといっしょがいいっ」

せんせーのあしにくつついてはなれないようにする。

「困ったねー」

せんせーはあたまをかきながらたばこをピコピコさせてる。

「あたしの家はあそこ」

ぼくのまえにあるおうちのとりにあるおうちをゆびさす。

「あそこなんだけどね、あたしはとっても忙しいの。だからあんまり家にいられないの。わかる？」

「うん……」

「あたしは君を一人にするのが心配なの。だからね、あたしの親友の家にしばらくの間君を住ませてもらおうの」

「うん……」

「あたしが帰ってきたときは一緒にいてあげるから、あたしがいない間はこの家で待っててね。わかった？」

「……うん……」

「よし、いい子だ！」

せんせーはぼくのあたまをなでてくれた。

「じゃあ、行くよ」

「うん」

せんせーはぼくのをひっぱって、おうちのピンポンをおした。

すぐにドアがひらいて、なかからおんなのこがふたり、ぴよこって
かおをだした。

「だーれ？」

「だれ？」

「あたしだよ、志穂だ」

せんせーのなまえをきいたら、ちっちゃんほうのおんなのこがせん
せーにとびついてきた。

「しほちゃんだ」

「元気だったかい？ 葵っち」

「げんき」

ちっちゃんおんなのこは、うれしそうにせんせーとしゃべってる。

すしおっきなほうのおんなのこは、ドアのむこうからきょーみなさそうにみてる。

「あつ、まってよ、おねえちゃん」

すしおっきなほうのおんなのこは、すぐにおうちのなかにはいろうとしてたけど、ちっちなほうのおんなのこにつかまった。

「じゃっ、あたしは先に中入ってるからね」

せんせーはたばこをピコピコさせながらおうちにはいっていった。つた。

ぼくがせんせーがはいつていったほうをみると、ちっちなほうのおんなのこがぼくにちかづいてきた。

「おうち、はいろ？」

ちっちなほうのおんなのこが、ぼくのをにぎってきた。

「え？　えと？」

「はいろ！」

ぼくはそのままおうちのなかにひっぱられてった。

「……………」

おっきなほうのおんなのこは、なにもいわないですぐちかくのドアをあけてへやにはいっていく。

ちっちゃなほうのおんなのこも、ぼくをひっぱっておんなじへやにはいっていった。

へやにはいると、せんせーと知らないひとがたのしそうにはなしてた。

「お？　来たみたいだね」

「この子がアンタの隠し子？」

「へ、志穂さんの隠し子かぁ」

「夫婦でボケんなっ!!」

スパパアアアンツ!!

せんせーがハリセンでふたりをおもいつきりたたいてる。

「志穂っ!! アンタよくも顔面叩いてくれたわねっ」

「まあまあ、良いじゃないか」

「良くないわよっ」

「いや、いんじゃない? 良い感じに整形出来そうだし。もう一発
いっとく?」

「けたぐるわよっ」

おんなのひとが、せんせーとたのしそうにくみて? をしてる。

「……………」

「お〜」

おっきなほうのおんなのこはムスツとしたかおで、ちっちゃなほうのおんなのこはおもしろそうにせんせーたちをみてる。

「そろそろやめないか。子供たちも見てるぞ？」

「ぜえ、ぜえ、へ？」

「はあ、はあ、は？」

おとこのひとがせんせーたちのあいだにはいつてふたりをとめる。

「あ、ああ。ごめんね〜。私としたことが、子供たちのことを忘れてるなんて……」

「すまん、チビども」

そういっておんなのひととせんせーは、テーブルのまえにすわって、ぼくたちをよんだ。

ぼくたちがすわると、おんなのひとがぼくのほうをみててをにぎってきた。

「はじめまして、私は柊^{ヒイラギ} 柚木^{ユキ}よ。よろしくね」

「ゆきねえさん？」

「あら？　うれしいことってく「オバサンだよ、オバサン」しいほお？」

またせんせーとゆきねえさんがくみて？　をはじめた。

「まあ、二人のことは放っておいてもいいよ」

おとこのひとはあきれがおでふたりをみてそういった。

「僕もはじめまして、だね。僕は柊^{ヒイラギ} 秋^{シュウ}って言うんだ。よろしくね」

「……………」

やさしそうなかんじのひとだけど、やっぱりおとこのひとはこわい。

「ん？　どうかしたのかい？」

ぼくがだまってる、しゅうさんがぼくのかおをのぞいてきた。

「っ！？」

「大丈夫かい？」

しゅうさんはぼくのかおをみながらきいてくる。

「……………」

「あゝ、秋っち。ちょっと、ちょっと」

だまつてるぼくをしゅうさんがふしぎそうにみると、せんせーがしゅうさんをてまねきしてよんだ。

「なんだい？」

「ちょっといろいろあってね。その子は人が怖いんだ。特に男が、ね……」

「……………そっか。わかったよ」

せんせーとしゅうさんがなにかはなしをしてるみたい。

「ちょっと。その話聞かせなさいよ」

「柚木。今はまだ言えない」

「……………そっか」

せんせーたちをみると、ちっちゃなほうのおんなのこがぼくのてをひっぱってきた。

「なに？」

「アタシはね、ひいらぎ あおいっていうの。よろしくね！」

ちっちゃなほうのおんなのこは、あおいちゃんっていうんだ。

「かえで」

「え？」

おっきなほうのおんなのこもなまえをおしえてくれたのかな？

かえでちゃんっていうんだ。おっきなほうのおんなのこは。

「えと、ぼくは……」

「そう言えば、君はいくつ？」

ぼくもなまえをいおうとしたけど、ゆきねえさんにじゃまされた。

「ぼくは12さいです」

「……12歳には見えないわね。
どうということなの？ 志穂」

「あゝ、その事情も今は言えないね。
まあ、強いて言うなら、過度の精神的ダメージが原因の精神不安定
状態だよ」

「ふうん」

ふたりはまたなにかのはなしをしてるみたい。なんだろう？

ぼくがかんがえごとをしてると、あおいちゃんがまたてをひっぱつてきた。

「なまえは？」

「あ、えと。ぼくはきりさき……」

「ん？ どうしたの？」

ぼくのかおをしんばいそうなかおをしてみてるあおいちゃん。

「きりさき かいと」

「かいにい?」

「うん」

「かいにい」

うれしそうなかおをしたあおいちゃんが、ぼくにベツタリくついついてきた。

「よかったね、葵。お兄ちゃんができて」

「うん!」

「楓は嬉しくないのかい? 弟ができて」

「……………」

みんなたのしそう？　にはなしをしてる。

でも、ぼくのいもうとは……

「ん？　どうした、灰斗」

「いもうとはまいだよ」

「あゝ、新しい妹が出来たんだよ、新しい妹が」

「あたらしいいもうと……？」

「そっ。新しい妹だ。麻衣ちゃんの妹でもあるんだよ」

「……………ぼくとまいのいもうと……………」

「そっ。二人の妹だ」

「……………わかった」

「よしっ、いい子だ」

せんせーがぼくの頭をなでてくれた。

「そして、私たちが新しい家族よ」

ゆきねえさんがてをひろげてる。

「ようこそ、柊家へ。私たちは、灰斗君、君を歓迎するわ」

そして、ぼくにあたらしいかぞくができた。

第一話

「ふっ、あゝあ」

目覚まし時計を確認。

うむ、いつもと同じ朝の五時だ。

ちゃっちゃんと家を出る準備して学ランに着替える。

居間に出ると、見慣れた白髪に無表情の女性がお茶を啜っていた。

「お早う御座います、マスター」

「おはようさん、インフ」

無表情の女性の名はインフ。

自称最高水準のアンドロイドだ。

感情はあるのだが、あまり見せない。

というか、あまり感情の起伏がないのだ。

ちなみに服装は、チャイナ服。

よくわからんが彼女の趣味？ らしい。

ちよこちよこ服装が変わるのだが、コスプレかと思うような物ばかりを好んで着る変わり者だ。

「ようやく今日から復学ですか？」

「ああ、長かったよ。

ったく、たかが上級生を殴り飛ばしたくらいで一ヶ月も停学なんて思わなかったぞ」

「正確には、嫌がる女生徒を長期に渡ってつけまわし、襲おうとしていたため、その場に居合わせたマスターが上級生の下顎を砕いたから、でしたか？」

「そっ。さらに言うなれば、その場にいた上級生十人の下顎と骨盤を砕いてやっただけだよ。

ったく、下顎ぶっ飛ばしてサイッコーに笑えるツラに整形してやろうと思ってたのによお。力足りなかったみたいだわ」

「マスター。あまりその様なことを申されていますと、せっかく皆様が頑張って停学で止めて下さった意味が無くなります」

「悪い、悪い」

茶を啜るチャイナ団子ヘアーロボに言われてもあんまピンとこんな。

無表情のままだし。

とりあえずオレも茶を飲み、鞆を持つ。

「んじゃ、オレは隣の姉妹の朝飯作りに行くわ」

「ならば私も行きます」

オレの言葉を聞き、インフも立ち上がる。

そのまま二人で並んで家を出て、隣に建つ柊家に向かった。

すで見慣れた柊家。

小六から中三の冬まで過ごしたんだから当たり前か。

オレは合い鍵をポケットから取り出し、慣れた手つきでドアを開け

る。

「ただいま？」

「失礼します」

まだ寝ているのか、家の中は静かだ。

まあ、仕方ないことかもしれないな。今この家には大人がいないんだから。

姉妹の両親である、柚木姉さんと秋さんは仕事の関係で今この島を出ている。

そのため、今この家には姉妹と、こうして出入りしているオレとインフくらいしかいない。

ちなみに、オレの保護者である志保姉は病院の仕事が忙しくてあんま帰ってこない。

まあ、帰ってきたら帰ってきたで大変だけどな。

そんな事を思いながら朝飯を作っていると、階段の方から足音が聞こえてきた。

「おはよう、灰ちゃん」

「おはようさん、楓」

眠たそうに目を擦りながら、全体的に小さな少女がリビングに入ってきた。

彼女の名は楓。柊家の長女で、オレの一つ上の学年で生徒会長をしている、他称才色兼備のスーパー会長殿だ。

ちなみに、セミロングの茶髪は地毛だ。

まあ、全体的に小さいのと胸がアップルパイの厚みといい勝負してるくらいしかないのが玉に瑕だな。いや、ほかにも難点はあるんだけど……

「ちょっと、灰ちゃん。私はお姉ちゃんなんだから、ちゃんとお姉ちゃんって呼んでくれなきゃダメでしょ？」

頬を膨らませ、腰に手を当てる楓。

いや、そう言われてもなあ。ずっと姉なんて呼んでないんだから今更変える気はないしなあ。

「ちゃんと聞いているの？」

そう言って、また頬を膨らませる楓。

いつ見てもこの表情は可愛いなあ。この頬をパンパンに膨らませて顔を真っ赤にするの。

「聞いているよ、かえちゃん」

「あうっ」

オレがそう返すと、たちまち顔を真っ赤にして俯く楓。

なんでかな。昔っから楓か、かえちゃんって呼んでなのに、最近のかえちゃんって呼ぶと顔を真っ赤にすんだよなあ。

そんな事を思ってる間に、楓はオレがいる台所から離れ、リビングに移動していた。

「よしっ、出来た」

楓が起きて数分後、朝飯が出来た。

今日は気分的にピザトーストとベーコンエッグ（だっけ？ あの手玉焼きとベーコンのやつ……まいっか）とサラダにリンゴだ。

「楓、インフ。朝飯出来たから、どっちか葵を起こしてくれ。んで、残った方は朝飯運ぶの手伝ってくれ」

二人がいるリビングに向かってそう言うと、オレは朝飯を乗せたお盆をウェイターのように片手に乗せてリビングに向かう。

リビングに着くと、インフがオレの手からお盆を取り、テーブルの上に乗せながら口を開いた。

「マスター。Ms. 楓はお手洗いに向かわれました」

「ん、わかった」

「私が朝食を配膳しておきます。ですので、マスターはM.S. 葵を」

「あいよ」

ここはインフに任せ、オレは二階へと上がっていく。

葵の部屋の前に着くと、ドアを二度ノックする。

「葵。起きろ」

しいん

変化無し。せつかく擬音入れてみたのに。なんかむなしくなっただけか？

オレは気を取り直してもう一度部屋をノックする。

「おい。愚妹。サッサと起きろ」

うん。やっぱり変化無しか。

よしっ、突入準備だな。

カウントダウン開始。

三……

二……

一……

ゴーッ！！

勢いよくドアを開ける。

「葵っ、起きろっ！」

「んっ、んうゝ」

ベットから声が漏れ聞こえるが、布団にくるまるだけでベットから出てこようとはしない。

ほおゝ、いい度胸だな。お兄様を怒らせたのかなあゝ？

オレは、葵が眠るベットに接近していく。

「んう、すう、すう、すう」

「まったく、寝顔は可愛いのに起きたらオレ限定の暴力女だからなあ。コイツは」

気持ちよさそうに眠る葵の柔らかい頬をつつき、寝顔を見る。

「んうゝ」

眉根を寄せて、布団の中をモゾモゾ動く葵。

さて、そろそろこの暴力お姫様を起こすかな。

「オラッ、起きろ愚妹！」

「きゃんっ！」

オレは布団を掴み、勢いよくひっぺがした。

掛け布団の下から腰まである長い茶髪の少女が、冬眠中のヤマネみ
たいに丸くなった状態で出てきた。

「デメエ、なにしやがるっ！」

この口の悪い少女の名は葵。

オレの一つ下で、学園の付属に通う中三だ。

いつもピンクの生地に可愛らしいアニマル柄がプリントされたパジ
ヤマを着ていて、日がな一日パジャマで過ごすぐうたらだ。

暴力お姫様のクセにこういった服装が好きなんだよなあ。部屋にも
所狭しとぬいぐるみが並んでるし。

「サツサと起きろ、愚妹。朝飯が冷めるぞ」

「うるせえよ、クソ兄貴」

気の強さを表すかのような吊り目が、オレを睨む。

ヤバいな。空気が熱くなってきた。

「焼くぞ、テメエ」

「焼かれる気もなければ、お前にオレを焼けるだけの力もあるとは思えんな」

口ではそう言いつつも、背中を冷や汗が伝う。

「そうか、そうか。じゃあ……」

ヤバい。焼かれるっ!!

急いで背後にあるドアへと走る。

「くたばれ、クソ兄貴イイイツ!!」

「ぐぼおふあっ!!」

ベットのスプリングを利用して跳躍し、オレの無防備な背中に炎を纏う、灼熱ライダーキックをかましてきやがった。

「ギヤアアアツ!!! 背中がつ、背中が焼けるうううっ!!」

皮膚が焼けるような痛みに廊下を転げ回る。

あんの発火能力者めえ。ファイヤースターターオレを殺す気か!?

なんとか廊下を這って階段を下り、風呂場に向かう。

サッサと上着を脱いで冷水で背中を冷やしていく。

火傷はないが、綺麗な青い痣がある。結構痛んだよなあ、あの愚妹の飛び蹴り。

ていうか、あの愚妹の蹴りはかなり強力だ。
確か前に十枚の瓦を軽々と割ってた覚えがあるんだよなあ。炎なんてただのオマケの演出だし。
ていうか、炎いらねえだろ。足の周りに出しときながらそれは使わずに、わざわざ服の下に炎を顕現させて皮膚だけ焼こうとしやがって。

そんな事を思っていると、背後に何かの気配を感じた。

「マスター。お二人が食事を終えました」

なんだ、インフか。

オレは水を止め、背中の水気をタオルで拭い取る。

「そっか。じゃあオレもサッサとメシを……」

「大変おいしゅう御座いました」

「は？」

無表情で訳の分からないことを言うインフ。

「ああ、そっか。お前も食っ……」

「大変おいしゅう御座いました」

だから、なぜにこのタイミングでそのような事を宣いやがるのかなあ？

服を着直したオレは、改めてインフを見てみる。

さっきと同じ団子チャイナ。特にこれといって変化は無いような………ん？

インフの口元に僅かに何かがついてる。

「インフ。お前、口元になんかついてるぞ」

「それはおそらく……」

口元についたものを指ですくい取る。

「先程、M s・葵と分けて食したマスターの朝食かと」

「そっか、そっか………と待て。お前、今なんか明らかにおかしい事言わなかったか？」

「いえ、特には……」

機械的に小首を傾げ、指についたものを舐めとる。

「オレのメシは？」

「大変おいしゅう御座いました」

「全部か？」

「M s・葵と私の体中に半分ずつ、大切な栄養分として摂取されました」

「低水準ロボ&愚妹どもめがアアアッ!!」

いくら心優しいこのオレでも、さすがにこれは怒髪天に來ちやいましたよ～～。

ブッ！！ コッロスッ！！！！

オレは二人に、オレ的正義の名の下に制裁を加えるべく、洗面所から出る。

まずは愚妹からだ。

アイツが発端にして元凶なのはすでに今までの経験が物語っているんですよ！

ズカズカと乱暴に廊下を歩いていく。

リビングのドアに手をかける。

ふっふっふっ。目に物見せてやるぜい。

テンションを上げ、兄として愚妹に教育してやろうと意気込む。

だが、この時オレは気づいてなかった。

オレの背後から魔の手ならぬ、魔のチョップが振り下ろされようとしていることを……

ズドムッ！！

「ガハッ！？」

背後からの確に、我が脳天に鋭く重い手刀が振り下ろされていた。

「マスッ」

ズドムッ！！

「ガハッ！！」

「ターッ」

ズドムッ！！

「ガボッ!!」

的確且つ高い攻撃力を誇る殺人チョップによって、立っていられなくなっていく。

「誰ッ」

ズドムッ!!

「ぐぼふっ!!」

だが、このバカロボの殺人チョップは、崩れゆくオレに一切の情け容赦もなく、チョップを決めてきやがる。

「がッ」

ズドムッ!!

「ゴボッ!!」

しかも、高威力が原因で何度も体勢崩れて位置がズレるオレの脳天に、的確に一片の容赦もズレもなく繰り出してくる。

「低ッ」

ズドムッ！！

「ぐばはっ！！」

オレ、コイツのマスターだよな？

「水準ッ」

ズドムッ！！

「ぐぶふっ！！」

自信なくなりそ——

「ですッ」

ズドムッ!!

「ごぼほっ!!」

ヤバイ、意識が……

「かッ」

ズドムッ!!

「ごぼふあっ!!」

テレレレ、テレレレ、テレレレ、テレレレ、テレレレ

どっかからそんなゲームオーバーチックなBGMが聞こえてくる。

「殺った? インフ」

意識が混濁しつつあるオレの耳に、愚妹の声が聞こえる。

「いえ、まだ意識が残っているはずです」

いつもと変わらぬ、無表情に死んだ魚のような目、抑揚のない声で愚妹に答える低水準。

「じゃ、トドメ☆」

可愛らしく死刑宣告を告げ、愚妹が大きく腕を振り上げる。

霞む視界の中で、確かにオレは見た。

愚妹の手から、少し大きなラジカセが高速で放たれ――

メギッ！！

「ぎよわああああっ！！！！??」

世界で最も尊いオレの頭が無事であることを祈る暇さえ与えられず、オレは意識を失った。

第二話

「あんの遺伝幼女めがつ」

こぶができた後頭部をアイス枕っぽいので冷やししながら、教室の机に突っ伏す。

「よお、灰斗。また葵ちゃんにやられたのか？」

笑いを堪えながらバカがやってきた。

この全身からバカを放ち続けるバカは赤城アカギ 渡瀬ワタセ。跳ねまくって
る赤く染められた髪に、バカが溢れて止まないバカだ。

「黙れバカ。無駄にバカ。変態バカ」

「ちよつ、バカ多くね!？」

「事実だ、人類史上最もバカで見るに耐えない変態バカ」

「……それってなんか凄くね？」

オレの机に乗りかかるんじゃないかと思うくらい勢いよく突っ込んでくる渡瀬。

「貶してんだよ。気づけ、バカ」

「ひでえよ……」

泣きそうな顔で崩れ落ちるバカ。

正直、見るに耐えないウザさなのでいつものようにゴミ箱に突っ込んで差し上げよう！

ああ、なんて優しいんだオレは。神様顔負けの優しさだ。

一通り自画自賛をしたオレは、うずくまっのの字を書いているバカに近づいてみる。

あまりのキモさに誰もが避けて通っている。

さて、どうやって捨てようか……

オレがそんな事を考えてると、背後からぬうつと何かが現れた。

「この見るに耐えないバカはどうしたのだ？ 霧崎氏」

「うをつ！？ ビックリした。なんだ、貴樹か」

コイツは桐生 貴樹^{タカキ}。常に悪巧みをしていそうな顔をしている男だ。事実、コイツは常に悪巧みをしている問題児だ。

ちなみにコイツは、相手の名前の後に必ず氏^{ウジ}をつけて呼ぶ変わり者だ。

この二人はオレの悪友で、よく三人で連nder。

「で？ これは何だ？」

ぐずぐず鼻を吸りながらの字を書き連ねている渡瀬を指差す。

「いつも病気だ」

「ならば、ゴミ箱行きだな？」

そういつて手際よくゴミ箱を持ってくる。

各教室には、分別をするためにいくつかのゴミ箱がある。燃えるゴミ。燃えないゴミ。ビン。カン。ペットボトル。この五つだ。だが、この教室、というより渡瀬が存在する教室には必ず”汚物用”とデカデカと書かれたゴミ箱がある。これは渡瀬専用のゴミ箱だ。貴樹は、渡瀬専用 であるこのゴミ箱を持ってきたのだ。

「さて、この汚物を詰め込むか」

オレは渡瀬^{バカ}の……いや、もうコイツの呼び名はバカでいいや。それを通るし。

オレはバカの空の頭を……いや、違うな。バカと変態とエロとキモさとetc.とetc.で構成された頭を掴み上げる。

「貴樹。セツトアップ!」

「オ〜〜ケ〜〜〜イ!!」

貴樹は汚物用ゴミ箱を傾け、ダンプがしやすいようにする。

「トライツ!!」

バカの体を宙に浮かせ、右の拳をバカの下デッ腹を殴り飛ばして差し上げる。

「ぐぶえっ!!」

体がくの字に折り曲がり、汚物用ゴミ箱にケツから入っていった。

「出来上がり」

ゴミ箱から足と上半身のみが出たバカヤドカリ、略してバカガリが出来上がった。

「喜べ赤城氏。貴様のような汚物に似合った巣を手に入れられたのだ。泣き叫んで喜べっ!!」

高笑いをしながら、貴樹がバカの巣をガンガン蹴ってる。

あんま蹴ると倒れ……

ガタンッ！

「イッテエエエエッ！！」

やっぱり倒れたかった。

はあ、バカがぶつけた側頭部をおさえながらなんか喚いて殴りかかろうとしてるけど、ゴミ箱という名の巣に詰められてるからカッコ悪いし、あそこからは動けんだろうな。

「ハッハッハッハッ！！ 赤城氏。貴様如きがこの俺に触れられるとも思っているのかっ！！」

妙に力強い声を上げ、貴樹がバカの顔面にハリセンによる高速往復叩きをキメてる。

「ブッ！！ ゲブッ！！ グボハッ！！」

段々バカのツラが赤くなっていくが、貴樹は「整形だっ！！」と力強く言い放ち、授業が始まるまでバカのツラをさらに叩き続けた。

………え？ 止めないのかって？
バカを言うんじゃないよ。これがいつもの朝なんだ。止める気もないし、学園関係者ですら渡瀬Ⅱバカ&変態で通ってるし、バカか変態でみんなわかるくらいこの学園じゃ常識の存在なんだからいいんだよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1063z/>

機械仕掛けの左腕

2011年12月3日23時45分発行